【歴史発見】
第四高女時代の音楽教諭　野矢トキ先生

実践女子大学生活文化学科助教　越山　沙千子

今年は府立第四高等女学校（以後、第四高女）が開校してちょうど110年となります。第一（現：白鳳高校）、第二（現：竹早高校）、第三（現；駒場高校）に次いで明治41（1908）年に多摩地域初の高等女学校として開校した第四高女には、ナンバースクールとして優秀な教師が集められていました。音楽においても、当時演奏家の育成と音楽の教員養成を担っていた上野の東京音楽学校（現：東京芸術大学音楽学部）を卒業した教師が赴任しました。開校時から昭和20(1945)年8月に第四高女に在職したことが判明しているのは3名。開校時から2年間在職した伊藤鈴先生（明治22(1889)年-昭和63(1988)年）、大正2(1913)年から大正8(1919)年の途中まで勤めた近藤千穂先生(明治17(1884)年-昭和24(1949)年)、同年10月から昭和20(1945)年8月まで勤めた野矢トキ先生の3名です。本稿では野矢トキ先生について取り上げたいと思います。

野矢先生経歴

野矢トキ先生
『第二十四回卒業記念寫眞帖』
昭和 9(1934)年より

野矢トキ(繙)先生(旧姓吉田、明治23(1890)年-昭和20(1945) 年)は、群馬県渋川の呉服屋の四女として生まれ、幼少期からマンドリンや胡弓、三味線、日本舞踊に親しんできたようです。群馬県高崎高等女学校を卒業し、明治41(1908)年東京音楽学校に入学。オルガンを専攻し、第四高女の校歌を作曲した嶋崎（島崎）赤太郎に師事していました。同級生には南多摩高校の校歌を作曲した信時潔や、《シャボン玉》や《カチューシャの唄》を作曲した中山晋平がいます。明治45(1912)年3月に卒業すると愛知県女子師範学校に赴任しました。教え子には後に婦人運動家として活躍する市川房枝がいます。野矢先生は名古屋で結婚し、大正3（1914）年に退職。しばらく子育てに専念し、ご主人の仕事の都合で東京に移った後、大正8（1919）年10月に第四高女に来ました。昭和20(1945)年8月2日未明の八王子空襲で亡くなるまで、約25年にわたって第四高女に勤めた野矢先生は、生徒たちにお母さん的存在として非常に慕われていました。卒業生からは、野矢先生のピアノがすごかった、ソプラノの歌声がきれいだったというお話を多く聞きます。私の祖母も昭和10(1935)年卒業生で、伯母に野矢先生のピアノの話をよくしていたそうです。

音楽の授業は歌が中心だった

音楽の授業はグランドピアノが置いてあった講堂で行われ、楽典（音楽の基礎的な理論）と歌を教えていました。楽典の教科書には福井直秋が著し、恩師嶋崎赤太郎が校閲に携わった『高等女學校　樂典教本』（1915）が用いられていました。歌の教科書は使用せず、野矢先生が黒板に楽譜を書き、生徒がノートに写譜していたと思われます。八王子郷土資料館には卒業生が使用した楽典の教科書と音楽ノートが所蔵されており、どのような歌を歌っていたのかが分かります。卒業生の証言と併せて歌われていた歌の一部をご紹介したいと思います。

◎行事の歌

入学後最初の音楽の授業で習った《校歌》は、初代校長の長尾松三郎先生が作歌をし、嶋崎赤太郎が作曲して昭和6(1931)年に制定されました。「作歌」というのは、主に明治20～30年代に主流であった「外国曲の原詩と無関係に、新たに日本語で作られた歌詞」を指しますが、長尾先生による「作歌」は「日本人が新たに作曲する場合の歌詞作り」の意味で使われています。東京芸術大学には全国の学校から届いた校歌作曲依頼状が保存されていますが、第四高女からの依頼状はありませんでした。よって、野矢先生が恩師である嶋崎に直接作曲の依頼をしたのではないかと考えられます。

今の生徒手帳にあたる『修養手帳』には《精進聖軍の歌》という歌が載っています。第2代校長の阿妻利八先生が非常に尊敬していた高等師範学校時代の先輩川村理平による歌詞に、野矢先生の同級生である中山晋平が曲をつけ、毎週月曜日1時間目に行われる校長先生の講堂訓話で歌われました。難しい言葉が並ぶ歌詞ですが、西川勢津子さん(1989:p. 28)によると「精進をする人は神の兵である。どんなことがあっても勇気を失わず、せかず、急がず、脇目をせず、元気を出して生きてゆきなさい」という意味の歌だそうです。

卒業式には《感謝》が歌われました。「♪雨の日も風の日も　安らかに守られつ～」という歌い出しで、生徒の憧れの曲でしたが、戦況が悪化した1944（昭和19）年の卒業式では《必勝歌》に取って代わり、残念に思う生徒もいたようです。また、卒業式では自己研鑽の大切さを説いた《金剛石》も歌われました。

◎日本の歌

武島羽衣作詞、瀧廉太郎作曲の《花》は、30年ほど前

に営まれた野矢先生の法要の際に墓前で卒業生による合唱で歌われたそうです。卒業生たちにとって思い出深い歌なのかもしれません。他にも《荒城の月》や《からたちの花》、《この道》、無声映画やチンドン屋の音楽として親しまれた《天然の美》（《美しき天然》とも）などが歌われていました。

音楽の授業風景
『第二十二回卒業記念寫眞帖』昭和 7(1932)年より

◎外国の歌

外国の歌には以下の表「外国の歌」のように、「作歌」（この場合は外国曲の原詩と無関係に新たに日本語で作られた歌詞の意味）によって現在とは異なるタイトルと歌詞で歌われていたものが見られます。原曲とは全く異なるタイトルと歌詞に驚きます。当時の生徒たちは「作歌」による歌を歌うことで、現在私たちが訳詞で歌ったり聴いたりする時とは異なる趣で作品を受容していたと思います。

もちろん、訳詞による歌も歌われていました。合唱曲《流浪の民》や試験曲の〈ソルヴェイグの歌〉は上級生が歌う憧れの曲として挙がります。〈ソルヴェイグの歌〉はグリーグ作曲《ペール・ギュント》中の曲で、身勝手な主人公ペールが世界を放浪した後、年老いて無一文になって若き日の恋人ソルヴェイグのもとを訪ね、迎え入れたソルヴェイグが歌う中ペールがこの世を去る場面の歌です。

野矢先生はどういった意図で選曲をしたのでしょうか。推測の域を出ませんが、歌詞の内容を考えると歌を通して良妻賢母教育を行っていたと言えると思います。しかし、それ以上に生徒たちに文化的・芸術的な体験をさせたい、情景が思い浮かぶような、素敵な音が鳴り響く歌によって生徒たちの心を豊かにしたいという思いを感じずにはいられません。野矢先生の幼少期や音楽学校での豊かな経験が反映されていると思います。

お話をお聞かせくださった卒業生の皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。今後も調査を続けて参りますので、野矢先生に関するエピソードや歌に関する情報がございましたら、教えていただけませんでしょうか。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（連絡先：南多摩同窓会あかね会事務局　または、越山
Email：koshiyama@akanekai.org）

主要参考文献

『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第1巻、東京芸術大学百年史編集委員会（1987）音楽之友社
『東京都立南多摩高等学校創立100周年記念誌　湧水万古』創立100周年記念誌委員会編（2008）東京都立南多摩高等学校創立100周年記念事業実行委員会
『写真でつづる母校の七十年』都立南多摩高等学校同窓会あかね会（1978）都立南多摩高等学校同窓会あかね会
『勢津子おばさんの青春物語』西川勢津子（1989）主婦の友社
『高等女學校　樂典教本』福井直秋（1915）共益商社書店
『母校が焼けた日　私の昭和20年』むらさき会（2001）日本エディタースクール出版部
『萌える　東京府立第四高等女学校―ラスト入学生の記』〈萌える〉編集委員会（1988）都立第四高等女学校第三十八回
『唱歌帖』『音楽ノート』『音楽帖』昭和4（1929)年卒業生
『修養手帳』昭和10(1935)年卒業生

外国の歌

作品名	歌い出し	原曲
才女	かきながせる　筆のあやに	アニー・ローリー（スコットランド民謡）
海樓眺望	朝日のぼる　海の面に	オペラ《リゴレット》より〈女心の歌〉（ヴェルディ）
水	水よいづち　流れゆく	サンタルチア（ナポリ民謡）
庭の菊	庭の千草も　虫の音も	The last rose of summer（庭の千草）
女徳の歌	八千草千草　茂れる中に	オラトリオ《ユダス・マカベウス》より〈見よ、勇者は帰る〉

著者紹介

越山　沙千子：八王子東高校を経て東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、同大学院音楽研究科音楽文化学（音楽学）専攻修士課程修了。昭和初期の洋楽受容に関する研究をしている。著書には「日本における《第九》――年末の演奏会普及の背景――」を執筆担当した『文化としての日本のうた』（東洋菅出版社）がある。共立女子大学、帝京大学非常勤講師等を経て、現在実践女子大学生活文化学科助教。八王子市在住。